



タイトル連覇にまつわるグランプリのドラマ

伝説の航跡

百物語

文 鍋島ヒロシ

パリの夏の日。オリンピック史上最高の五連覇を達成して、シュローズを脱いだ(引退した)グレコローマンのレスラーがいた。「4」はあっても(あのカール・ルイス氏や伊調馨さんなどと)、「5」に到達したアスリートはこれまでにいなかった。

オリンピック五連覇の歳月は、最初の優勝から16年だ。ロペス・メネスというキューバの偉人の名前には忘れても(向こうの人の名前は、普通に覚えにくいものだからね)、五連覇の偉業はこれからも残り続ける。果たして今後、この記録に並び立つアスリートは出てくるのだろうか。

こんなことを思っていたら、それからほどなくして馬場貴也が、ポートレースメモリアルを連覇した。同一SGの連覇は史上16件目である。7年前に調べた時には13件だったものが、毒島誠がメモリアル(18、19年)、吉川元浩がクラシック(19、20年)で追加し、今回の馬場に至る。

だが、同一SG三連覇が実現していないのは7年前と同様だ。毒島も吉川も新記録の懸かる大会では、準優にも乗れなかった。7年前は最も接近した92、94年の賞金王決定戦、野中和夫さんの連覇と3年目の準優勝を書いたのだが、これを含めて過去15件で、3年目の大会で優出したケースは3回で、準優敗退が5回だ。不出場も1回ある。

一対一の格闘技と違って、6艇で争うボートレースには、モーター抽選があり、得られる戦力が異なる。連覇を難しくさせている一因だろう。ただ、出場人数が少ないグランプリは、単純に優勝確率が高い。その前に11か月の賞金争いがあると言われるかもしれないが、これを長いスパンの予選だと考えれば、一過性ではない実力が反映されると思える。その時々で常連が覇を競ってきた。

そのためリピーターの目立つSGタイトルで、昨年まで38回の開催に対して優勝経験者は25人。V3が4選手、V2が5選手いる。前述の野中さんは、史上5回目の同一SGの連覇達成者で(ちなみに4回目も90、91年の笹川賞を勝ったこの人だ)、初めて三連覇に挑んだ選手になったが、2度目もまた賞金王が舞台だった。

◎第10回賞金王決定戦(住之江)

植木通彦↓中道善博↓烏野賢太↓熊谷直樹↓松井繁↓野中和夫

史上に名高いSG優勝戦である。この一戦の勝利で、勝者がすべて持ついく形になったが、植木の参戦ムードは決して良くなかった。前期F2は消えていても、2本目の60日休みは残っていた。この年の記念戦線では、笹川賞の準優勝が最高で優出機会は7の0。出場12選手中7位の選出だった。

1995年といえば、阪神大震

災に地下鉄サリン事件。大変な災厄に見舞われた年だったが、奇しくも3月の平和島、総理大臣杯は大会5日目がサリン事件当日。騒然とする東京の地で(本場に事件が拡大するのはここからだだったが)、この日の準優を6コースで勝った服部幸男が、翌日の優勝戦もまくり快勝。続く地元の笹川賞では植木を従えてSG連覇を達成した。賞金王こそトライアルで6着を並べて、尻すぼみの一年に終わったものの、賞金トップは堅持して、この年のMVPに輝いている。

29年前とはいえ有名な優勝戦なので、幾つか思うところだけを述べたいが、レースは世代の束縛を振り切るような、植木の思い切ったコース取りで始まった。中道を内に見る起こし位置は80まで入っていただろう。先に書いたが前期F2(年間F3)で60日休みが控える身、それで良くゼロ台スタートが…。

先立つ8月から住之江にFKS(フライング感知装置)が導入されていた。危険な仕掛けを察知してヘルメットの中が鳴る。これが植木の保険になった。熊谷が、烏野が、次々植木に付き従った、皮肉にも地元の人々が外に出された。インの中道から深く入った内4艇がゼロ台発進、ダッシュに引いた野中と松井が置かれた。中でも野中がドカ遅れした。

そして1マーク。中道が先マイ、

植木は外マイ。後方では野中が捨て身の切り込み。これによって3コースから外は行き場を失くした。バックに目をやれば植木と中道、二人の世界になっていた…。「何周走ったのか覚えていません」

死闘を制した植木は言った。「後ろを走っていて、転けるなよと気が気ではなかった」
第三者の野中に言わしめた。「ええレースやった。悔いはない」
中道は史上に残る敗者になった。

◎第11回賞金王決定戦(戸田)

植木通彦↓林貢↓安岐真人↓古川文雄↓中道善博↓高山秀則

「植木だけは優勝させん」
中道は一年前の好敵手に対して、不穏な言葉を吐いた。遺恨をもたらしたのはトライアル初日で、楽勝のまくり態勢だった中道に、内から植木が突っ込んだことによる。実はこの段階で植木には、乗り心地が伴っていなかった。それにも関わらず前のめりの走りをしたため、他の選手からもひんしゆくを買うレースになった。温厚な今村豊が「植木、レースをしようや」と諫めたほどだ。

でも、二人は共倒れをしなかった。中道は怒りの連勝を決めて、6着・1着・1着でトライアルを乗り切った。一方の植木もターン回りを整えて、2戦目を01スタートで強まくり。こちらも3着・1

着・3着とボーダーをクリアした。こうして優出メンバーを見渡すと、登録3千番台は彼だけという、ベテランの反攻に晒されていた。中でも中道がファイトを露わにしていた。植木は唯々ターンの力で黙らせた。

インから古川・安岐・中道・植木・高山・林の2対4。安岐と中道がシタタカに内と間隔を取って、外3艇は少し窮屈な進入になった(何せ狭い戸田水面である)。スタートタイミングを記すと、インからコンマ04-01-03-05-05-08。この戸田にはFKSがないのに…いや、ないからベタ落としがいなかったのか、ともかく物凄いスリットラインの攻防になった。

中道は植木の内にピタッと付けて仕掛けた。ここまでは作戦通りでなかったか。しかし、植木の走りが上を行った。文字通り上を越えていった。1マークはまるで他艇に魔法をかけたかのようにだった。

安岐は「いいまくり展開になった」と思ったという。思ったのも東の間、その外を植木が駆け抜けていった。中道は一瞬にして置き去りにされた。回った途端に独走態勢が出来上がった。本当に素晴らしいターンだった。

「満点のレースができました」
水面の良さとターン回りの充実が合致して、レールの上を走っているような微動だにしないツケマ

イだった。2着争いが入れ替わり立ち代わりの接戦だったから、余計に植木の突き抜け具合が目立つたのだ。

賞金王連覇。前年の表彰式における「来年は2億円を狙いたい」の発言を、植木通彦は現実のものとした。ボートレース史上初の『2億円レーサー』が誕生した。思えば第1回大会覇者(彦坂郁雄)が、年間の獲得賞金を初めて「億」の桁に乗せてから、10年の歳月が経っていた。その間に優勝賞金も3000万円↓4000万円(5回大会)↓5000万円(7回)↓6000万円(9回)と増額されて、今回の植木は8000万円を獲得した。そして翌年遂に1億円の大台に乗ることになる。

残念にも植木に対して意地を見せられなかった中道は、2年前に野中和夫の三連覇を阻止し、前年は植木との死闘を演じて連覇を逃した存在だ。今度こそ…と言いたるところだが、結局最後の賞金王の舞台となった。また、ここでもに敗れた安岐、高山といった賞金王優勝者も、トライアルで敗退した賞金王V3を誇る野中も、2度と11月までの賞金レースを勝ち抜くことはできなかった。振り返ればエポックメイキングな大会だった。翌年からは古くても今村豊の、ほぼ3千番台以降の選手で占められることとなった。

◎第12回賞金王決定戦(住之江)

服部幸男↓熊谷直樹↓西島義則↓太田和美↓今村豊↓植木通彦

当時の賞金王決定戦とトライアルには、果し合いのような空気が漂っていた(水上の格闘技とはよく言ったものだ)。前述の植木→中道の名勝負や遺恨もそうだが、予想の枠を超えた競り合いが展開された。レース中のトラブルも少なくなかった。

この大会のトライアルでは、尋常でないほど事故が続出した。まず野長瀬正孝が初日にエンストをすれば、2日目には市川哲也(エンスト)、松井繁(エンスト)、鳥野賢太(反則失格)の3艇が絡む大アクシデント。市川が病院に直行し、レース後の共同インタビューに出られなかった。そしてトライアル最後には濱村芳宏が転覆の憂き目。出場12選手のうち5名が決定戦の道を閉ざされたり、大きく得点を落としたりした。例年では考えられない状況になった。

- ①西島義則 6・3・5着(16点)
- ②太田和美 2・2・1着(28点)
- ③植木通彦 4・1・1着(26点)
- ④熊谷直樹 5・2・3着(21点)
- ⑤服部幸男 2・4・4着(21点)
- ⑥今村 豊 3・1・2着(26点)

西島は普通なら絶対に勝ち上がれない得点だ。服部、熊谷とてギリギリの点数。しかも、ここに至って西島がイン取り有利の1枠を引いた。トライアルのデキから機力劣勢は明らかだったが、何せこの選手にこの枠番である。悩まし

い番組になった。

出足抜群・伸びは並み…の今村が珍しくコースにこだわっていた。トライアル3戦は全部2コース、一方で6枠が2度あった。だが、1枠時も2コース、西島の前付けを許したからだ。6枠に入った決定戦もトライアルをなぞるだけだった。

三連覇の懸かる植木は2戦目からまくり連勝。「自分のレースができるエンジン」と、波乱のトライアルの中で確かな足取りを示してきた。得点トップの太田が、地元とはいえ初出場なら、おのずとこちらに本命印がズバリ並んだ。記録への期待が高まっていた。

しかし、決定戦は進入から波乱の流れになった。回り込んだ今村がそのまま2マーク横に座り込んだのだ。西島はそれに対応できず2コースへ。熊谷が3コースを粘り、4コースの太田までがスロー発進。植木はカドとはいえ想定外の5コース、服部が大外発進となった。

前年の植木に負けず劣らずのスーパーターンだった。こちらはまくり差し、トライアルの間は行き足を余していた服部だったが、この日の朝の調整で回転がピタッと来た。熊谷がまくった1マーク、植木、太田を飛び越えて、差しに構えた西島とイン潰れた今村の間を突き抜けた。どこにもロスのない美しい航跡を描いて抜けた。

2億5555万円。この年に服

部幸男が残した獲得賞金額は、今でも歴代2位に記録されるものである。2年前は年間SGV2で臨みながら、植木と中道の熱闘をピットで眺めるしかなかったが、今度は自分が主役に躍り出た。そしてこの記録を破ったのが5年後の植木だ。同時に前年大会覇者の連覇を阻んだ。

◎第16回賞金王決定戦(住之江)

田中信一郎↓今垣光太郎↓今村豊↓松井繁↓石田政吾↓F山崎智也

その前年大会は、集計トラブルで発走が20分遅れた。それを言い訳にはできないが、山崎が痛恨のフライング事故。返還金額18億5882万円は、ボートレース史上ワースト4位にして、返還1艇では未だ最悪の金額として残っている。だが、勝者のイン戦は確固たるものだった。田中が地元で、最高タイトルで、初めて頂点まで駆け上がった。

前年大会からファイナルの枠番が、トライアルの得点順に変更されたが、平和島から住之江に開催地が帰り、インの勝機はより増すものと考えられた。田中は2・4・2着と未勝利ながら、混戦の得点争いに恵まれた。1位突破を利したインキープから、FKSを鳴らさない会心のスタートを決めた。鳴って明らかに落とした今垣が2着、鳴ったが落とし切れなかった山崎がF。明暗がクッキリ分かれた結果になった。

伝説の航跡

SG初優勝といっても、この年の田中は総理杯④、笹川賞②、オーシャン③、チャレンジ④と、4度の優出を経てきた。成すべくして成した戴冠劇だったともいえる。そしてここから彼は、グランプリの歴史で最も濃密な4年間を過ごす。

翌年は前述の如く植木の年だった。賞金記録を樹立するまくりりに、田中の連覇は阻まれた。レース展開も象徴的で、ひとりゼロ台で仕掛けた田中を、植木がジカ内で受け止めたのだ。田中はまくり差しにチェンジしたものの及ばず2着。それでも存在をアピールして見せた。

◎第18回賞金王決定戦(住之江)

田中信一郎↓瓜生正義↓山崎智也↓松井繁↓平石和男↓濱野谷憲吾
住之江のレースに一定の影響を与えてきたFKSは、3月に廃止されていた。この年の田中は、モーターボート記念の優勝があり、自己最高の選出3位から勝ち上がった。決して枠番抽選に恵まれたわけではない。初戦こそ2枠2コースで巧差しを決めたが、2戦目・3戦目で引いたのは5号艇。その時の立ち回りが実に心憎かった。
2戦目はオールスローの6コースになったが、終始3番手を競って写真判定で3位入線。この時点で1着・3着、当確ランプを点灯させた。秀逸だったのはトライアルラストの3戦目だ。前付けに付

き合わない単独ダッシュの6コース。その分伸びて1マークは好位へ、まくり差し一気に突き抜けた。前日まで得点トップの山崎智也が、前のレースで3着に敗れ、このレースでは田中の他に、松井繁、平石和男、瓜生正義にトップ通過の可能性があった。枠なり2コースの平石と前付け3コースの松井を、4コースから瓜生がまくる展開を、物の見事にひっくり返した。コースよりターン一発に賭けたことが功を奏した。エンジンも完全に仕上がっていた。

もはや形勢は田中の方に傾いていた。決戦は普通に枠なり進入だった。インの起こし位置が理想的なら、スタートもターンも完璧だった。瓜生が巧いまくり差して一瞬迫ったものの、舳先が掛かることはなかった。派手なりアクションに思いを乗せて、田中は2度目の優勝の瞬間を迎えたのだ。

そこには昨年の悔しさがあった。実は前日に父親が亡くなっていた。様々な感情があった。だが、この大会の田中の歩みは、トライアルは状況に応じて戦略的に、そして最後は王道のイン戦。実に堂々としたものだった。翌年は一転して、勝負事の意外性を演出することになる…。

◎第19回賞金王決定戦(住之江)

田中信一郎↓上瀧和則↓濱野谷憲吾↓今垣光太郎↓松井繁↓植木通彦

この年は選出12位。次点の瓜生正義と32万1千円の差だった。前年のワンツーが再び争ったわけだが、ここから田中は大きく跳躍した。

初戦の枠番が選出順になって初めての大会。6枠発進が決まっていた田中は、ここを2着にまとめた。4コース上瀧がまくる展開を、6コースから追走…これをバジョンアップしたのが優勝戦だった。

2・4・4着(21点)。田中は目立たない成績ながら、3戦目の4着は最終ターンの切り返し。執念の走りでもターナー上に留まった。どこかで見た着付けと思っただら、97年の服部と同じ。6コースで大波乱! 大げさに書く歴史は繰り返したのだが、発走を待たされたのは、田中の初優勝時と同じだった。場外発売のトラブルで36分も遅れた。

枠番順に、つまり得点順に植木、今垣、上瀧、濱野谷、松井、田中の6選手。戦前は植木の賞金王V4成るかが一番の注目だった。対して伸び一発に賭けていたのが上瀧で、トライアルもチルト2度の4コースで1・2着。スローの2コースでは6着に大敗していた。スタート展示で単独6コースから仕掛けたほどだ。

上瀧は4カドになった。本番は植木―今垣―松井がスロー、上瀧―濱野谷―田中でダッシュ。濱野谷と田中がマークに回った。上瀧

が委細構わずまくっていった。その強襲に煽られて、植木が振り込み松井と纏れた。本命サイドは1マークで崩れた。上瀧を追って絶妙に切り込んだのが田中だった。2マークの差しは伸び返されたが、立ち上がりのアシでむしろ詰めた。田中の出足が良くなっていった。逆に取り付けの高い分、上瀧のターン回りが不安定だった。2周1マークにチャンスが訪れた。追い風に流れる上瀧の内懐を一気に衝いた。

最後のプロペラ調整、上瀧マークの判断、何より水面熟知のコーナーワークが合わさって、選出順位やトライアルの成績、枠番を覆した。史上稀な逆転劇はこうして作られた。田中は連覇を果たした。しかし、翌年は獲得賞金が伸びず、出場さえ叶わなかった。最初に書いた三連覇の懸かる大会で「不出場1回」は、この時の彼を指す。

それでもこの4年間で、田中が賞金王で刻んだ航跡は、四連覇に近づくものだった。優勝3回と準優勝で3億4500万円を手に入れた。これは彼の通算獲得賞金の15・5パーセントを占める。7300回を超える出走レースの中の輝ける4走である。